

多様性の浸透

—1960年代後半以降のプレップ・スクール—

岩 井 八 郎

Becoming Diverse:

The Transformation of American Prep Schools after the late-1960s

IWAI Hachiro

1. あるハーヴァード大生の悩み

「1974年にセントポールズ校 (St. Paul's school) からハーヴァード大に進学した時、私は多くのクラスメートが、私が大学に入学する前に受けてきた教育について奇妙な考え方をしていることを発見して、失望してしまった。その時なぜだか不思議に思ったが、この論文に取り組むようになって、やっとその理由がわかった。

その創立から現在に至るまで、セントポールズや他のアメリカの寄宿舎学校は、アメリカ社会における教育制度としての役割に関して、著述家や社会学者や教育者から投げつけられる批判に耐えなければならなかった。このような学校に対する批判は、トーンや強調点が時代によって異なるが、基本的なメッセージは同じである。アメリカの寄宿舎学校は、地位を鼻にかけるようなスノビズムや非アメリカ的な階級的優越性を周到に育む苗床である。」⁽¹⁾

セントポールズ校からハーヴァードに進学した学生が、母校について書いた卒業論文をこのように始めている。いわゆる「プレップ・スクール」についての一般的な理解と自分の経験とのギャップが、この卒論のモチベーションになっていた。セントポールズ校は、名の知られたプレップ・スクールの中でも、最も古く、金銭面で豊かで、排他的な学校の1つに数えられてきた。上流階級の子弟を寄宿舎制によって囲い込み、将来の特権的な地位にふさわしい人物へと教育する機関とみなされていた。

このようなプレップ・スクールについての理解は、20世紀初頭にほぼ定まった。当時のアメリカ社会では、移民が急速に増大し、また産業資本主義の発展によって新興の億万長者が台頭していたが、寄宿舎学校の排他的な教育によって、旧来の上流階級が自らの地位を守ろうとした。また新興層の子弟も受け入れて、自らの階級の中に吸収しようとした。ハーヴァードやイエールやプリンストンといった大学は、プレップ・スクールの卒業生を優先的に受け入れたし、さらにプレップ出身の多くが、排他的な社交クラブのメンバーになった。その結果として、アメリカ経済

を支配する強力なネットワークが形成されたと言われている⁽²⁾。

「ハーヴァードやイエールやプリンストン大学出身ということだけでは充分ではない。物をいうのは、本当に上層階級の子弟しか入れない排他的な予備校（プレップ・スクール）なのである」。⁽³⁾ アメリカの上流階級の研究において、社会学者C.W.ミルズはこのように書いたが、プレップ・スクールの教育の特徴についても説明を加えている。寄宿舎学校の日常生活は簡素で、スパルタ的であるが、誰もが同じような日課をたどるという点では、学校の中では地位の平等が保たれている。学校には中流階級の時代精神というべき競争心が欠けており、人目に立ちすぎないことが重視されている。このような学校は、なにかはっきりした実際的な目標に向かっていくようには見えない。なにごとにも度が過ぎないことが重視されている。排他的な学校でこのような教育をうけることが、プロテスタントの紳士のスタイル、すなわち上流階級のスタイルの源になる。「簡素な物腰、おちついた威厳は、自分の世界の中で自己の存在がはっきりと確立され、そこからは、追い出されることも無視されることも、鼻であしらわれてしまうことも、解雇されることもありえないという内的確信からのみ生じうる」⁽⁴⁾。

ミルズの書物は、現在までもその影響力を保っており、プレップ・スクールを特権的な階級への「特異な教育」を行う学校だとみなす解釈がある。セントポールズ校出身のハーヴァード大生は、一般に流布した、そのような見方に直面したのであろう。

彼がなぜ違和感を感じたのであろうか。確かに、今も広大な敷地とクラシックな校舎で提供される高価な教育は、アイビー・リーグ校などの有名大学へ入学する近道とみなされている。しかし、現在のプレップ・スクールは、もはや限られた出自の生徒にクラシックな教育を与える排他的な機関とはいえない。第2次大戦後のアメリカ社会の中で、プレップ・スクールも外部社会の影響を受けながら変化を余儀なくされてきた。メリトクラティックな学業基準の重視、生活上の厳格な規律訓練の廃止、若者のポップ・カルチャーの浸透、バラエティに富んだ授業科目の提供、男女共学、人種や宗教や出身階級の異なる生徒の受け入れなど、多くの側面で変化が確認できる。とりわけ、1960年代後半から70年代初めにかけて、公民権運動やベトナム反戦運動の影響は、プレップ・スクールにも及んだ⁽⁵⁾。現在でも、すべての面でよくデザインされた高価な教育を提供する学校であるが、もはや外部からの影響を遮断できる孤島ではなく、70年代初頭を転機として、外部の基準が広く浸透した学校になっている。上のハーヴァード大生は、すでに変化を見たセントポールズ校での教育を受けていた。

プレップ・スクールに浸透してきた外部の基準とは「多様性（diversity）」である。ハーヴァード大やイエール大などのエリート大学では、生徒や教師の構成、専門分野、カリキュラムなどにおいて、優秀性を追求しつつ、多様性も高める方向で改革が行われてきた。1930年代において、ハーヴァード大の新入生の半数以上が私立学校の出身者であり、その約3分の1がフィリップス・エクセター、フィリップス・アンドーバー、セントポールズといったプレップ・スクールから来ていた⁽⁶⁾。エリート大学の改革においては、プレップ・スクール出身者の多さは、排他的な同質性の高さを意味して、多様性にとっての障害と見なされてきた。しかしプレップ・スクールにおいても、この多様性を高めようと改革が繰り返されてきたのである。これは、ワスプ・エリート層の権威の失墜の後に生じた、アメリカ社会全体におけるエリートの定義の変化ともパラレルな関係にある。本稿は、多様性の浸透という観点から、1960年代後半以降のプレップ・スクール

の変化を記述する。とくに最後の節では、セントポールズ校に着目して、生徒の構成やカリキュラムにおける変化を詳しく検討したい。

2. 伝統校とオルターナティブ

2000年のアメリカ大統領選挙の際、ジョージ・W・ブッシュ現アメリカ大統領の略歴がしばしば紹介された。フィリップス・アンドーバー校（Phillips Andover）からイエール大学へ進学したが、当時は「ジェントルマンのC」タイプの学生であったと記述されていたことは記憶に新しい。アンドーバー校とは、伝統的に合衆国東部の名門私立大学に卒業生を送り出してきた、名門私立中等学校の1つである。「ジェントルマンのC」とは、ワスプ上流層の子弟で、社交クラブやスポーツ中心の学生生活を享受し、勉強はほどほどというタイプを指す。彼は、1964年にアンドーバーを卒業し、イエール大に進学した。イエール大の入学者選考基準が大きく変化する少し前である。

教育社会学者にはなじみの社会学者、ジェローム・カラベルは、1960年代の後半、公立高校からフィリップス・エクセター校（Phillips Exeter）に移り、ハーヴァード大へ進学するというルートを辿っている。エクセター校も名門私立中等学校である。ユダヤ系のカラベルは、「ジェントルマンのC」ではなく、奨学金を得てエクセター校で進学準備をした、「メリット」タイプの学生であった。アンドーバーとエクセターは、名門私立中等学校でも、大学進学のための学業を重視する「アカデミー」とよばれ、「食うか食われるか型の実社会を疑似体験させる」場というように特徴づけられている⁹⁾。

「アカデミー」に対して、セントポールズ校は、作家スコット・フィッツジェラルドのいう「セントマイダス校（黄金学校）」に属する。「St. Grottlesex」とも呼ばれ、監督教会（エписコパル教会）系の寄宿舎学校であるセントポールズ校、セントマークス校、グロトン校、セントジョージ校、ミドルセックス校、ケント校が含まれる。オールド・マネー（代々の富裕層）の教育機関として設けられ、伝統的には最も排他的であった、いわゆる「プレップ・スクール」である。イギリスのパブリック・スクールがモデルになっており、ルーズベルトがグロトン校出身というように数々の著名人を輩出させているが、その一方では、「ジェントルマンのC」タイプの主たる供給源であった。

アンドーバーやエクセターよりも排他的であるが、セントポールズ、グロトンほどではないという点で、両者の中間とみなされている学校としては、ローレンスビル校、ホッチキス校、ヒル校、チョウート校がある。裕福な非監督教会系の創設者によって設立され、伝統的に裕福な企業家が子弟をあずけたところである。カリキュラムは、新興の企業家層にとっての紳士教育へのニーズと大学進学へのニーズが組み合わさっているとされている。

以上が、最も威信の高い伝統的な12校のおおまかな分類である¹⁰⁾。もちろんこれらによって、アメリカの多数の私立中等学校がカバーできるわけではない。タイプの異なる学校が多くあり、創設者の教育観によっても学校の在り方が左右されている。1920年代から30年代にかけて、評価の定まった名門校の刺激を受けて、ニューイングランド地方では、多くの私立中等学校が創設された。そのなかには、当時の革新主義的教育観から影響を受けた学校もある。

バーモント州にあるパトニー・スクール（Putney School）という革新主義的学校を取り上げてみよう。パトニー校は、1935年に創設された小規模の私立学校である。伝統的なプレップ・スクールが、男子の寄宿舎制で、厳しい規則、定められた日課、古典語の学習、スポーツ重視などの特徴を備えていたとすると、パトニーは対照的であり、男女共学で、カリキュラムでは古典語よりも知的な創造力、芸術、演劇を重視した。また生徒には運動選手であるよりも、俳優、美術家、音楽家、工芸家であることが求められたし、広大な農場の中にある学校の日常活動へ民主的に参加することも強調された。創設者は、Carmelita Hintonという女性である。Hintonはデューイやジェームスの教育思想を学び、ハーヴァードの教官やケンブリッジ在住の知識人の子どもが通う革新主義的小学校で教えた後、パトニーにおいて自由で民主的な教育の場を実現させようとした。高額授業料を払うことができる、大学教授、芸術家、ジャーナリスト、精神分析家といった上層中流階級からの支援を得た学校であって、伝統的なプレップ・スクールのオルターナティブである⁽⁹⁾。

企業家層の子弟が通ったホッチキス校とパトニー校の卒業生を比較した研究を見ると両校の差異がよくわかる。1940年から50年にかけての卒業生が対象だが、ホッチキス出身の進学先は、イエール大学が半数以上を占めている。一方、パトニーの場合、ハーヴァードが23%である他は、進学先は多様であり、入学後に転学する者も多い。また修士や博士課程への進学者の割合については、パトニー出身に大学院への進学が多く、ホッチキス出身では学部までが6割を占めている。さらに職業を見ると、ホッチキス出身はビジネス、金融、法曹関係で6割以上になっており、パトニーでは、教師、エンジニア、医者などばらつきが大きい。確かにこの時期のホッチキス校は、裕福な企業家層を再生産する学校と言ってよいだろう。しかし、パトニーの芸術を重視するカリキュラムや個人主義的で自由な教育環境、また多様な進学先大学と専門職志向のほうが、プレップ・スクールの現在の姿に近いだろう⁽¹⁰⁾。

この時期に創設された学校から、後のハーヴァードやイエールの学長が育っている。この点が興味深い。1960年代から70年代にイエール大学の学長として、いくつもの改革を手がけたキングマン・ブルースター（Kingman Brewster）は、1923年に創設された、ベルモント・ヒル・スクール（Belmont Hill School）に通った。ベルモント・ヒル時代（1930年に入学）のブルースターは、学業よりも、課外活動の弁論グループや歌唱、演劇にエネルギーを注いだ。とくにグロトン校との対校弁論大会では、大活躍をして勝利を得た。彼は、当時の校長について「ビジョンがあり、高度な知的水準を厳格に守る偉大な人物であったが、ほとんどのプレップ・スクールが、社会的順応性を展示する記念物であった時代に、個性を極めて重視してくれた」と言っている。月曜から金曜までを寄宿舎で過ごし、週末はボストン界限を自由に行動することが許されたようである。これも、グロトンやセントボールズのような寄宿舎学校とは異なる経験で、グロトンの生徒が、日曜の夜、チャペルで司祭からノーブレス・オブリージ（高貴な身分に伴う道徳的な義務）についての説教を聞いているとき、彼はボストンで左翼知識人のディベートを聞いていた。イエール大の改革者としてのブルースターは、「革新主義的エスタブリッシュメント（Progressive Establishment）」と呼ばれる。彼の在任期間に実施された入学者選考基準の改革を見ると、ベルモント・ヒル時代に形成された伝統的なプレップ・スクールへの対抗意識が背後にあったと判断できる⁽¹¹⁾。

1991年から2001年までハーヴァード大学の学長を務めたニール・ルーデンスタイン (Neil Rudenstine) は、1927年に創設されたウスター・スクール (Wooster School) の出身である。ベルモント・ヒルもウスターも小規模で、寄付金もなく、パイオニア的な学校であったが、創設者の強い使命感によって運営されていた。ルーデンスタインは学長在任中にベルモント・ヒル・スクールで記念講演をしており、その内容は1920年から30年頃に新しく出来た私立学校の一面を伝えてくれる⁽¹²⁾。次のように述べている。

「学習へのアプローチは、基本的にシンプルで健全であった。自分の教える科目を愛しており、個々の生徒に手厚く世話をする教師を見つけることである。その教師が、生徒の人間としての成長を助ける。心の成長だけではない。教師は、日々の学校生活の厳しいプログラムをスパルタ式に維持する。教育はプロセスであって、学校は真のコミュニティとみなされるもので、芸術、運動、公的サービスを含めて、多くの活動はすべて純粋に教育的だと考えられていた。

創設時の目標は、1920年代から変わっておらず、若者にどのように学ぶかはもちろん、どのように参加するか、またどのようにリードするかを教えることであった。いやむしろ、教えること、参加すること、リードすること、学ぶことのすべてが、実際にどのように、部分に切り離すことのできない、力動的で人間的な経験の一部となりうるのかを示すことであった」。⁽¹³⁾

フォーマルな教育活動に付随して生じたり、偶発的に生じたりするような、はっきりと眼にみえない要素が生徒を変化させる。優秀な学校では、予期せぬ出来事も学校全体の一部であると理解されなければならない。ルーデンスタインは、13歳の最初の学期にアドバイザーの部屋で、整然と本棚に並んだ膨大な蔵書に圧倒された経験を語っている。一人の人間がそれほどまでに多くの本を買い、読み、持っていることは、思いもおよばなかった。ましてや、アドバイザーがそれぞれの書物がどこに配置されているのかを知っていたのも驚きだったそうである。ベルモント・ヒルもウスターも、伝統的なプレップ・スクールの影響を受けていたことはもちろんだが、当時の革新主義教育観の影響も読み取ることができるだろう。

3. 静かな変革

プレップ・スクールは、民主主義への脅威であり、紳士気取りのスノップを育てるだけである。1933年から53年までの20年間、ハーヴァード大の学長を務めたジェームズ・コナントは、このようなプレップ・スクール批判の急先鋒であった。しかしコナントがハーヴァードを去った後、1950年代後半になると、プレップ・スクールの変化が伝えられるようになる。

1955年の『ニューズウィーク』誌に「プレップ・スクールの現在」と題する記事が掲載されている⁽¹⁴⁾。反民主主義的な兆候がプレップ・スクールの建物から消えているとして、次のように記述している。「裕福な家庭出身の生徒たちの欠点を簡単に許してしまうような、いわゆる『スノップ工場』が、真剣な学習のためのセンターに置き変わりつつあり、精神の貴族制 (the aristocracy of the mind) のために労力が惜しげなく注がれている。ほとんどのプレップ・スクールでは、かつて召使いや「掃除婦 (biddies)」がしていた作業が、男子生徒自身によって行われている。しかも作業は、アルファベット順に課されている場合が多い」⁽¹⁵⁾。最もはっきりわかる変化は、奨学金を受ける生徒の数が増加したことである。この時期、生徒の少なくとも4分の1程

度が奨学金を得ている。

プレップ・スクールが学業重視となった背景の1つには、ベビーブーム世代が中等教育段階の年齢になり、応募者も増加して、競争率が3倍から4倍になったことがある。もはや家柄だけでは入学できない。公立学校から私立へ移ろうとする入学志願者も増えて、入学には、学業成績やテストの点数が必要になっている。ただし、カリキュラムが大幅に変わったわけではない。数学が重要視され、音楽やモダンアートの授業が新たに設けられているが、ラテン語やギリシャ語の授業も維持されているとの報告である。

ハイスクールへの進学率が上昇し、巨大化した公立学校を避けようとする裕福な親の間で私立への関心が高まってきた。『ニューズウィーク』誌の記事はそれへの対応のようでもある。プレップ・スクールの方が公立のハイスクールよりも「民主主義的」であるとも書いている。「現在のプレップ・スクールでは、大金持ちの息子と農家の息子とがルームメートになる。公立では、2人は決して会えることはないのに、皮肉なことにカースト意識を育んでしまうかもしれない」⁽¹⁶⁾。

同じ時期の『ビジネス・ウィーク』誌にも紹介記事があり、賛否両論が取り上げられている⁽¹⁷⁾。『ビジネス・ウィーク』誌でホッチキス校の事例が多いということから、第2次大戦後のアメリカ社会で経済的繁栄を享受している社会層を読者として想定していると考えてよいだろう。『ニューズウィーク』誌と同じように、プレップ・スクールでは奨学生が増え、出身背景の多様性が高まって、民主化されてきた点が強調されている。学業の重視はもちろんだが、「遅咲き」の子どもには、公立よりもよい環境であるとのことである。

ネガティブな側面に関する記述に注目してみよう。依然として上流階級的で、学校が理想とする人物像への「順応 (conformity)」を強く要求し、スノビズムも根強い。このような従来からの批判に加えて、『ビジネス・ウィーク』誌の記事は、大学生活において有利かどうかを問題にしている。プレップ・スクールの卒業生は大学までに高度な水準の授業を受けた結果、大学の1年目は、さほど努力しなくても公立のハイスクール出身よりも良い成績を修める。しかし学年を上げるに従って差がなくなる。当時のプリンストン大学の調査では、平均としてみるならば、3年、4年になると公立出身の方が成績がよい。公立出身のほとんどは、ハイスクール時代に学年の成績上位3位以内であるし、学校新聞の編集者であったり、弁論チームのキャプテンであったりと「粒ぞろい」であって、その違いが上級生になって現れるようである。また大規模な男女共学の大学でも、プレップ出身の学生はうまく学生生活に適応できない、と記事は指摘している。厳格に管理された寄宿舎という環境で生活を送ったために、大学生活の「自由」が重荷になる。過度の飲酒や外泊など、問題を抱える学生にプレップ出身が多いとのことである。

アメリカ社会が経済的繁栄を謳歌した1950年代から60年代にかけてのプレップ・スクールは、上流階級のスタイルを寄宿舎生活の中で学ぶという伝統は維持されているものの、戦前よりもはるかにメリトクラティックになった。ベビーブームのおかげで入学志願者も多くなったが、学業の優秀性に関しては、都市郊外にあるハイスクールや私立の全日制 (デイスクール) と競争しなければならなかった。学業面では戦前よりもはるかに優秀になったにもかかわらず、ハーヴァードやイエールやプリンストンが、全米各地から多様な出身背景の学生を集めようとしたため、もはや卒業生の大半を名門大学に送り込むことはできない。これが先にあげたプレップ出身大学生に見られる問題行動の背景の1つであろう。たとえば、1965年にセントポールズ校を卒業した102

名の中で、22名がハーヴァード、13名がイエール、7名がプリンストンに入学した。戦前期と比べれば、大幅な減少である。しかし1965年の卒業生の場合、最も入学競争が厳しくて学業成績も以前よりはるかに優秀なコーホートであった。102名の中で40名が、全米メリット・テストの上位優秀者に入っていた⁽¹⁸⁾。

変化は、学業の面だけではない。プレップ・スクール自体も、多様な出身背景の生徒を受け入れようとする試みを始めている。たとえば、Independent Schools' Talent Searchというプログラムが1963年より実施され、寄宿舎学校で学べば才能を開花できそうな、貧しい家庭出身の若者を広く探し出そうとしている。夏季講習で、寄宿舎での生活を体験してもらおうというプログラムもある。また、都市のスラムや貧困、人種対立などの社会問題に疎い生徒は、将来の指導者として重大な欠点を抱えてしまうということから、学校が外部社会から孤立している点が問題視されるようになった。このような流れの中で、プレップ・スクールの生徒が、スラムでの社会奉仕活動へ参加するようになったし、ワシントンの議員の下で政策立案過程を学ぶインターン・プログラムも考案された。最高学年に対しては、「自主研究プロジェクト (independent study project)」といて、好きなテーマを1年間自由に研究するという科目も作られた⁽¹⁹⁾。1950年代から60年代にかけて、プレップ・スクールが、外部社会の変化への対応を進めてきたことがわかる。

この節では、激動の60年代末をあえてスキップしてみよう。60年代末については、後の節で詳しく取り上げる。

1976年に「プレップ・スクール・ブーム」と題する短い記事があった⁽²⁰⁾。60年代末には、エリート大学への通路であった伝統校も、もはや役割を終えて消滅するのではないかという予測が語られていた。しかし、そのようなベシミズムには根拠がないとこの記事は書いている。1970年代になって、ハーヴァードもイエールも、私立出身の生徒を以前よりも多く合格させるようになった。また、ニュー・イングランドにある有名なプレップ・スクールでも応募者が急増した。記事は、不況やインフレ、授業料の高騰にもかかわらず、親は以前よりもまして、子どもを私立で学ばせようとしていると報告している。

この「プレップ・スクール・ブーム」の背景には、大規模化し、生徒が孤立化してしまう公立のハイスクールに対する幻滅感がある。大規模な公立学校では、教師との親密な関係を持つことができないし、共同体的な意識を育むこともできない。中程度の能力では、多数の生徒の中に埋もれてしまう。暴力やドラッグ、教師のストライキなどの問題を抱える公立学校の質への疑問も大きくなった。小規模な私立学校では、トラッキングがないし、教師の注意も行き届くであろう。優秀な生徒なら公立でもやっていける。真ん中あたりの生徒こそ、私立学校で教育を受けたほうがよい。この時期に高まった私立への関心は、エリート教育を求めるよりも、親密な人間関係と生徒個人のニーズにあった教育を求める動きである。それに対応するように、私立学校も多様化し、新しい実験的な試みをカリキュラムに導入するところが増えている。30の異なる英文学のコースを提供する学校があれば、ヒッチハイクを自主学習のプロジェクトにしたり、心理学を教えるところもあらわれている。高額な授業料を払って子どもを私立におくる家庭は、従来の上流階級だけではない。中流階級が地位の維持もしくは上昇のために、私立の教育に投資しはじめたのである。

1980年になって、『オフィシャル・プレッピー・ハンドブック』という奇妙な書物が出版されて

いる。なんと邦訳まである⁽²¹⁾。「お坊ちゃま」や「お嬢ちゃま」のための生活スタイル・ガイドブックといえるものである。家庭生活からはじまり、マナー、プレップ・スクールの紹介、面接で成功する方法、学業、大学のタイプ、社交生活、セックス、服装など、上流階級的な生活スタイルが細分化され、カタログ化されている。もはや特権的な階級としては扱われていない。「プレッピー」とは、「趣味のよい」ライフスタイルであるという程度の定義である⁽²²⁾。

「アイビー・リーグ・ジレンマ」というコラムがある。プレップ・スクールの生徒は、アイビー・リーグ校を目指して教育され、合格する可能性も高いが、その割合は低下しており、一世代前の「プレッピー王国」ではないと指摘しており、さらに「プレッピーの経歴にとって、アイビー・リーグ校で学んだということほど、はくのつくことはないのですが、この8校よりはるかにプレッピーらしい雰囲気と外見を持つ大学が多いことも事実です」と言う⁽²³⁾。そして「プレッピーたちは、より統一された小さな学校を選びます」とある。プレッピーらしい大学の「ザ・ベスト・テン」の一位は、Babson Collegeとなっている。説明では、「ここにいる学生は、みんなハーヴァードを落ちたひとばかり・・・ダディの会社に入るまで、4年間ひまをつぶしたい金持ちのガキども学校が行く学校です」とある⁽²⁴⁾。60年代の激動を経て、わずか10年ほどでアイビー・リーグ校は、プレップ・スクールにとって進学先の選択肢の1つになったようである。

4. オリバー・ストーンの反抗

オリバー・ストーンは、『プラトーン』『ウォール街』『7月4日に生まれて』『JFK』など、アメリカ社会の深部に鋭いメスを入れる話題作を次々に発表し、アカデミー監督賞を2度受賞した映画監督である。映画のインパクトは強烈であるが、経歴もきわめて異色である⁽²⁵⁾。1946年ニューヨークに生まれ、父は株式仲買人のユダヤ系アメリカ人であり、母はローマ・カトリック教徒のフランス人である。しかし本人はセントポールズ校と同じ監督教会派プロテスタントである。伝統的なプレップ・スクールのザ・ヒル・スクールからイエール大学に進学する。しかし、突然退学、アメリカ陸軍に入隊して、歩兵としてベトナム戦争に従軍する。1968年に帰米して、ニューヨーク大学フィルム・スクールに学び、映画の道に進む。この経歴の外面を見ただけでも、当時のワスプ・エスタブリッシュメントのアウトサイダーが、中枢への教育を受けながらも脱線したとわかる。ジョージ・W・ブッシュ現大統領も1946年生まれである。ワスプ・エスタブリッシュメントの出身でアンドーバーからイエール大卒（同じコーホート）である。対比は鮮やかである。

ユダヤ系でありながら、監督教会派の日曜学校に通い、名門プレップからイエールへ進学する。オリバー・ストーンのベトナム従軍は、身に纏った虚飾の経歴を脱ぎ捨てて、しかも生身のアメリカ人であろうとする決断であろう。ブッシュ的な経歴への反発は明らかである。

伝記にある、ヒル校についてのエピソードを取り上げておこう。ヒル校は、きびしさで知られる一流の全寮制男子校で、家に戻れるのは、感謝祭、クリスマス、イースターの休暇だけに限られていた。入学手続きでは、オリバーではなく、ウィリアムをファーストネームに使ったとある。これも、ユダヤ系であることが表にでない配慮である。ヒル校は、たくさんの厳格な規則があり、権威主義で、圧迫感を強く感じさせる「ほんとうにきつい学校だった」。服装はいつもスーツとネクタイである。「まださむい頃に起床。毎日の礼拝。それから5時間の授業。先生はよかった

けれど、規律ずくめ。くさいロッカールームに、まずい食いもの。やたらつっぱた連中が多くて、スポーツでも競争ばかり。夜、待っているのは、4時間の自習時間。俺はたっぴり規律をたたきこまれたよ。いやでいやでたまらなかった」と述べている⁽²⁶⁾。

ヒル校入学の目的は、ただ1つ、イエール大学入学であった。もちろん他の生徒の目的も同じで、「エリート社会になんとかもぐりこもうとする人間たち」の間で型にはめる教育に耐えながら、オリバー・ストーンは真剣に勉強に励んだ。

また学校で認められるには、スポーツで活躍しなければならない。当時の友人の言葉に次のようにある。「キャンパスでのさばっていたのは、レスラーでした。ヒルのレスリング部はえらく野蛮でしたが、毎年タイトルを取っていたんです。フットボールも強かったですね。肉弾戦のスポーツは、えらく人気があったんですよ」⁽²⁷⁾。オリバーが取り組んだスポーツは、テニス、クロスカントリー、水泳であった。残念ながら、「肉弾戦」のスポーツではない。

学業とスポーツに忙殺され、本来の楽しみであった「書くこと」に費やす時間がなくなった。しかしオリバー・ストーンは、少ない時間でも、「書くこと」でファンタジーを生み出そうとしたり、思索をめぐらしたりして、頭の中に「逃げ込んだ」。皮肉なことに、ヒル校は英語教育について先端的なところであったようである。当時のヒル校を紹介する文章を見ると、全米の高校や大学から300名以上の英語教師を集めて、男子学生に対する「詩の教育」についてのカンファレンスが開かれている⁽²⁸⁾。おそらくヒル校の英語教育は、オリバー・ストーンが後に脚本家として才能を開花させる基礎となったであろう。イングリッシュ・クラブの卒業論文では、3つの英語劇を扱い、やがては長編の叙事詩を書きたいという志を持ったとある。プレップ・スクールにおける教育の両義的な性格がよくわかる。

ヒルの学生は最上級生になると、たいていは大学入学を心待ちにしながら、女性と交際する機会を探したらしい。近く的全寮制女子校とのダンス・パーティがそのチャンスであった。ダンス・パーティに出かける学生とは反対に、オリバー・ストーンは部屋に閉じこもっていたとある。

1964年の9月にイエール大学に入学する。すぐに幻滅して、6ヶ月後に休学、1年間サイゴンで英語教師をして帰国した後、一度は復学して小説を書くが認められずに挫折。退学して、陸軍に入隊する。伝記には、イエールでヒル校の4年間をまた繰り返さなければならない。成功しようとする学生と競争しなければならないと痛烈に実感させられたとある。そして、「イースト・コーストの社会経済的な産物」としての自分の鑄型を壊そうとしたのである。

入学して割り当てられた部屋のルーム・メートは、2人の中西部出身の学生で英国国教徒、しかも奨学金をもらっていた。「オリバーには2人とはほとんど共通点がない」と伝記にはあるが、必ずしもそうとは言えない。ワスプのエスタブリッシュメントから見れば、3名とも明らかにアウトサイダーである。

当時のイエール大学では、メリトクラティックな入学選考基準が重視されるようになり、公立高校からの入学者も増えていた。1950年の新入生の36%が公立の出身であったが、オリバー・ストーンが入学した1964年では、56%に増加していた。またかつては一部のきわめて優秀な学生に限られていた奨学金についても、貧困層からの入学者を増やすため「ニード・ブラインド (need-blind)」政策が実施され、経済的な援助を必要とするアメリカ人学生には、奨学金が与えられるようになっていた。もはや家庭の豊かさは、入学者選考過程で決定的な要因ではなくなっ

ていた。ルーム・メートの2人は、このような学生集団の多様化をすすめる政策の結果、イエールに入学してきた学業優秀な学生であったのであろう。もちろん、オリバー・ストーンも学業優秀であった。しかし当時のイエール大は、まだユダヤ系の学生にとって開放的であったとは言えない。

戦間期にハーヴァードやプリンストンでも実施されていた、ユダヤ系学生を一定数に限定しようとする「割当制」の影響が根強く残っていた。1961-62年にアイビー・リーグ校8校におけるユダヤ系学生の割合を比較したデータによれば、イエールは12%で最下位となっている。コロンビアが45%で最も高く、ハーヴァードは21%であった。イエールの割合は、1950年代から60年代半ば頃まで10~12%であった。それが上昇するのは、60年代も後半になってからである。ユダヤ系知識人が名声を獲得して、ハーヴァードなどで職を得るのも、60年代末よりもさらに後である。その頃になれば、キャンパスでユダヤ系もカトリック系もほとんど差異がなくなった。区別する理由がなくなったのである⁽²⁹⁾。

オリバー・ストーンは、少し早くイエール大学に入学してしまった。伝統的なプレップ・スクールからイエールへというコースの輝きも、公立出身の学業優秀な奨学生の台頭により色あせつつあったなかで、キャンパスにはユダヤ系学生の住み心地の悪さがまだ残っていた。反戦運動や学生の反乱も、もう少し後である。このように見ると、時代の動きとの微妙なずれが、オリバー・ストーンの反抗の源であり、また創造力の源でもあると読める。

5. メリトクラシーの嵐：イエールが冷たい

オリバー・ストーンがいた当時のヒル校の校長は、イエール大学で学業にもスポーツにも秀でた学生であって、その後、アンドーバーやセント・マークスで英語教師として、また学校経営においても実績を積み上げてきた、私立のエリート教育の現場を知り尽くした人物であった⁽³⁰⁾。伝統的なプレップ・スクールには、このようなタイプの校長がいる。アイビー・リーグ校の関係者とコネクションがあり、それを維持しながら、一定数の卒業生を名門校へ送り込んでいた。しかしメリトクラティックな入学者選抜が広く実施されるようになり、公立や私立の通学校との競争も激しくなると、伝統的なプレップ・スクールもエリート大学進学者のシェアを以前のように維持できなくなっている。

ハーヴァード大の場合、コナント学長はプレップ出身の「ジェントルマンのC」タイプを排し、全米各地の公立高校から学業優秀な学生を入学させようとした。コナントの在任中に、確かに学生の出身地域の多様性は高まったが、学生は上流階級もしくは上層中流階級出身が大半で、有名なプレップ・スクール出身の学生が優先される傾向も存続していた。コナント以後になると、入学者選考の基準は、学業成績とそれ以外の要素が微妙なバランスで考慮されるようになる。多様性は、地理的背景や社会経済的背景のみならず、個人の資質も含めた基準を用いて、追求されることになる。トップ1%の学業成績だけを基準に入学者を選考しても、面白い学生集団を構成することはできないだろう。アカデミックな能力の最低ラインをかなり高い基準に設定しておき、その範囲内で学業以外の要素を考慮して入学者を選抜する。運動選手であることや課外活動の経験、人種はもちろん、ハーヴァード卒業者との縁戚関係も考慮されている⁽³¹⁾。

用いられた入学者選考方法は、かなり複雑である。出身地域や出身学校のタイプによって、入

学願書が分類されて (dockets), それぞれの分類カテゴリーごとに, 個人的資質, 学業成績, 運動選手, 課外活動, インタビュー結果などの基準を用いて, 願書などの書類が評定される仕組みになっている。そこには, 恣意的な判断が入る可能性が十分残されているのである⁽³²⁾。

この分類カテゴリーを見ると, 「アンドーバー, エクセター」と「ニューイングランドのトップ私立学校」が独立したカテゴリーとして扱われている。全体の数値で見ると, 1950年代後半から70年代半ばまで, 公立高校出身の割合は, 1960年の51.5%から75年には62.5%に高まっており, ハーヴァード出身者の子弟は15%にとどまっている。しかしカテゴリーを個別に見ると, 1975年でも「アンドーバー, エクセター」と「ニューイングランドのトップ私立学校」という2つのカテゴリーは, 志願者の中で合格率が最も高いところである。ハーヴァード的な伝統や人的関係の維持, 上流階級からの資金援助などが配慮されている⁽³³⁾。

イエールの場合, 1950年代から公立高校出身の学生も増え, 選考の基準も学業中心になりつつあったが, 依然としてプレップ出身で文武両道, 人格円満な人物が優先されていた。家柄や経済的特権を前提にした上での, 「公共奉仕」や「リーダーシップ」が好まれていた。変化は, キングマン・ブルースターが学長に就任し, インスリー・クラークを入学者選考主幹に任命した時から始まる。公民権法が通過した翌年の1965年から70年まで, クラークは入学者選考主幹であったが, イエールという豊かな資源を持つ大学から最も利益を受けるべき学生とは, 最も能力が高く, 動機においても優れており, 成功する可能性が最も高い学生であって, 彼らを選考すべきであると主張した。そのような学生がイエールを志願していないとすれば, 探し出さなければならない。クラークは, スタッフを増やし, しかもアフリカ系のスタッフも加えて, 全米の公立高校, とくに大都市内部の高校を訪ねて, イエールに入学可能な優秀な学生をリクルートしようとした。その結果, 学業の基準が高まり, 公立高校の出身者の割合もアフリカ系学生の割合も急速に増えたが, 反対に, イエール卒業生の子弟のシェアが低下した。このような急激な方針の転換の背景としては, イエール大学が連邦政府から予算を獲得するためにも, 入学者選考の基準を公民権法に照らして妥当なものにする必要があった。

変化は急激であった。理工系の教授は, 新入生の優秀さに目を見張ったが, それだけではない。ブルースター学長の好みもあって, 芸術家, 音楽家, 俳優志望の学生も前例のないほどの数になった。クラークのメリトクラティックな方針の特徴は, テスト得点を重視したことに加えて, 家系, 富, プレップ・スクールの教育, イエールとの関係のような伝統的な特権に対する配慮を最小限にとどめた点にある⁽³⁴⁾。

プレップ・スクールの学生は, 突然, 公立高校出身の学生と同じ基準で, イエール入学を競わなければならなくなった。プレップ・スクールの校長は, 突然の手続きの変更に面食らうことになった。ジョン・F・ケネディの出身校であるチョート校で生じた混乱の様子が伝えられている⁽³⁵⁾。

1968年の春のことである。大学に入学するだけが教育の目的ではないと言っても, 親にとっての期待は, チョートが子どもを有名な大学へ入学させてくれることである。メリトクラティックな選抜基準が浸透するようになって, そのような期待は大きく, 大学進学担当の教師は「10年前とは違うのだ」と繰り返さなければならなくなった。そこに, イエールの方針の転換である。その年, チョートの154名のうち152名が53の大学に進学した。ハーヴァードには, 61名が志願して, 28名が合格して25名が入学している。プリンストンは, 30名が志願して17名が合格であった。

ところが、イエールの場合、28名が志願して、合格した者がわずかに5名、しかも入学した者は3名だけであった。クラスで一番の生徒も落ちてしまった。頭脳の優秀さのみならず、リーダーシップやその他の活動でも優秀さが求められた。数年前なら、クラスで中程度の成績でも、イエールの卒業生の子どもなら、イエールに入学できた。

それだけでは大きな問題にはならなかったが、チョートの最上級生の一人が、イエールの入学者選考主幹インスリー・クラークにインタビューして、学生新聞の『チョート・ニュース』に「なぜイエールはチョートに冷たくなったのか」と題する記事を掲載した⁽³⁶⁾。その内容が、校長や教師たちの逆鱗に触れてしまった。チョートの優秀な生徒がイエールを志願しないという指摘はよいとしても、クラークは、さらにチョートは優秀な生徒を入学させていないと言った。そして、なぜ人材が不足しているのかについて、クラークは、チョートが卒業生の子どもを優先して入学させていることに問題があると指摘してしまった。イエールは今や、全米に25,000もある中等学校から有能な生徒を探して入学させようとしているが、まだ8,000程度としかコンタクトが取れず、1,500ほど訪問したにすぎない。有能な人材はまだ隠れている。チョートのような学校が、全米を代表する学校であろうとするのなら、入学者選考部門の担当者を増やし、「未開の地を開拓」して、人材を集めなければならない。卒業生の子どもを集めて、手間をかけて育てるという目的が寄宿舎制学校にはあるだろうが、それではイエールへの入学者は増えない。

クラークは、チョート校の方針に対して、次のようにアドバイスをしている。チョートは「偉大な学校だ」といって、新しいアイデアに対して防衛的になり旧習を守ろうとするが、それを改めるべきである。もっと実験的に新しい試みをすべきである。そして、新しい方向性を他の学校に示すような「灯台 (lighthouses)」になるべきである。

クラークの指摘はもっともである。しかしそれを認めてしまえば、チョートは有名大学への入学に不利だということになる。校長も教師も猛烈に反対した。上に紹介したようなハーヴァードの入学者選考を例にして、「チョートではなく、イエールが脱線したのだ」と主張した。しかし、インタビューした学生は、クラークの指摘から強い影響を受けて、「チョートの卒業生は、とても人格円満であるから、ただ人生を円く転がっているだけで何も手をつかまえていないのだ」「我々は、けっして自己防衛的ではないと誓おう」と書いている⁽³⁷⁾。

これは1968年の出来事である。当時、チョートに限らず伝統的なブレップ・スクールは、大きな転換期を迎えていた。屋台骨を揺るがすような出来事は、「メリトクラシーの嵐」だけではない。チョートのドキュメントには、学校の規律を犯す事件が相次ぎ、学生生活の改善を求める要求も出され、政治的な無力感を克服しようとするような動きがレポートされている。学生の異議申し立ては、次のようである⁽³⁸⁾。

第1に、自分の時間が十分ない。チョートでの生活は、あまりにも細かく、隅々まで組み立てられていて、立ち止まって自分について考えることができない。

第2に、外部社会で生じている出来事について情報が遮断されている。チョートは、閉鎖的なコミュニティである。外部社会で物事を動かしている人物から、話を聞かせたがらないところがある。

第3に、学校ではわくわくするようなことがあまりない。教室では、生きているという実感が得られない。雰囲気は抑圧的である。

第4に、生徒と教師、生徒と経営者との間でほとんどコミュニケーションがない。年配の教師は、ぼんやりした眼差しで教室を見渡し、眠たそうな眼で時間を気にしながら、一世代前に作ったような授業の課題を繰り返しているだけである。

第5として付け加えると、自分自身にもっと注意を向けなくてはならない。自分の無力感と戦わなければならない。

このような異議申し立てを主導したのは、成績優秀で学生新聞に寄稿したり編集するようなトップの生徒であった。かつては、学業にも課外活動にも秀でた学生が異議を申し立てることはなかったために、学校関係者の困惑は深まった。チョートの歴史上初めて、学校批判の急先鋒が学生委員会の委員長に選出された。ベトナム反戦、公民権運動、大学キャンパスの騒乱など、学べきことは教室の外側で生じていた。

この時期、チョートの生徒を対象に生活意識調査が実施された。クラークにインタビューした学生(John Olson)が中心となって、138もの質問が用意された。何人かの教官やイエール大の社会学者も加わって作成された調査は、生徒の日常的な行動や意識を暴露してしまった⁽³⁹⁾。

536人の回答者のなかで、20%の生徒がマリファナを試したことがある。半分以上が自分の家庭はアメリカの上位4分の1に入ると信じている。半数が家庭や学校で喫煙している。半数の学生が人生について「シニカル」である。半分以上が親しく話できる教師が2人程度しかいない。360名が校長とチョート校について議論するのを躊躇する。3分の2が平均的な男子よりも自分は人気があると思っている。83%がチョートの卒業生に対するステレオタイプ化された型があると思っている。80%がチョートでは制限がありすぎると考えている。さらには、売春の経験まで尋ねており、6.1%がイエスと答えている。

このように事態がきわめて深刻化したため、校長のセント・ジョン(St. John)は全校生徒を前にしたスピーチで打開を図ろうとした。「OK牧場の決闘」として後に語られるような、鬼気迫るスピーチであったとある。「破壊的になるな、建設的であれ (be constructive)」が、主たるメッセージであった⁽⁴⁰⁾。

事態は改善の方向へ向かう。若手の教師がひそかに集まって、どのようにすれば学校の規律やカリキュラムを改善できるかを話し合うようになった。また教師と生徒からなる合同委員会が設置されて、学校の問題が協議されるようになった。いわゆる「民主化」への改革案が提起された。細かい服装の規則などを簡略にして、学生生活をより楽しくする。ゲッソーでの学習支援活動のような学校外の社会活動への参加を可能にする。上級生には、選択科目の幅を広げて、厳格な成績評価ではなく「合格・不合格 (pass-fail)」の評価を導入する。さらに、伝統的な女子寄宿舎学校であるローズマリー・ホール(Rosemary Hall)校と合併して、男女共学になることがアナウンスされた。

イエールの入学者選考方法の劇的な転換は、それだけが単独で伝統的なプレップ・スクールを混乱させたのではない。学校の規律やカリキュラムなど、学生生活の日常に変化が求められていたところに加わった一撃であった。もちろん公民権運動やベトナム反戦などの時代的な文脈もある。インスリー・クラークによる学業を重視し生徒集団の多様性を高めるという方針は、多くのプレップ・スクールの関係者にも理解された。クラークの在任中も、アンドバー、エクセター、ホチキス、ディアフィールドなどはイエールに多くの生徒を送り込んでいた。プレップ・スクー

ルは、メリットと多様性を追求する学業の優秀な学校と上流階級のライフスタイルを維持する学校に分かれつつあった。クラークの一撃はその分化を決定づけたと言える。

6. ハーヴァードの逮捕者

激動の1960年代後半、1964年にカリフォルニア大学バークレー校で始まったキャンパスの騒乱は、全米各地に広がり、1968年にはコロンビア大学、1969年にハーヴァード大学へと拡大した。ハーヴァード大では、大学本部のあるユニバーシティ・ホールが学生によって占拠されたが、当時の学長が警官隊の突入を認め、175名の逮捕者を出した。ハーヴァード大の歴史上、2度目の「偉大なる反乱」と呼ばれている。キャンパスの騒乱の主要な原因となったのは、よく知られているように、ベトナム反戦であり、人種差別反対であった。ハーヴァードの場合も、ROTC (Reserve Officers Training Corp) という予備兵訓練のプログラムに対する反対運動に端を発している。しかしここで注目するのは、175名の逮捕者の大半が、裕福な家庭出身であったという点である。逮捕された175名の中で、わずか1名がハーヴァードの奨学生であり、連邦政府からの援助を得ていた者も32名にすぎなかった⁽⁴¹⁾。そして、多くが有名なプレップ・スクールの出身であった。

当時のラジカルなハーヴァード大生の内側については、スティーブ・ケルマン (Steven Kelman) というSDS (Students For a Democratic Society) のメンバーが、克明な記録を残している⁽⁴²⁾。ケルマンは、SDSのメンバーを「生まれながらのラジカル (hereditary radicals)」と「ワスプの反逆者 (WASP rebels)」に分けている。彼自身は前者に属し、社会主義者の家庭で育ち、ハーヴァードに入学後もYPSL (Young People's Socialist Leagues) のリーダーであった。1969年までに、SDSの内部で2つのグループの対立が深まっており、ユニバーシティ・ホールを占拠したのは、後者に属する「毛沢東主義進歩的労働党 (Maoist Progressive Labor party)」が多かった。「だれがハーヴァードのSDSに加わったのか」について、ケルマンは次のように書いている。

「マルクスの信奉者というだけではない。それ以上に、私はこの現象に階級分析を適応すれば有効であろうと思う。もっとも、SDSは自分にそれをあてはめることを拒むであろう。家族の収入：アメリカ人の年収平均が8,000ドルのところ、ハーヴァードの学生の平均は、17,000ドル、SDSの平均は、23,000ドルである。(出所：Soc Sci 125というSDSが自主運営し、ニューレフトに属する生徒が受講する授業で、家族の収入について調査した結果)。中等学校での教育：ユニバーシティ・ホールの占拠で逮捕された150名ほどのハーヴァード大生のうち、おおよそ50%がプレップ・スクールの出身であった。しかもセント・ポールズのような最も排他的な学校の出身が最も多かった。ハーヴァードの学生全体では40%ほどが、プレップ・スクール出身である。(出所：私のルームメートのElliot Abramsが、逮捕された学生は、どこのハイスクールの出身かを勇猛果敢に調べた結果である。すべての社会学者は感謝すべきであろう)」⁽⁴³⁾。

ケルマンによれば、当時の左翼の家庭出身である「生まれながらのラジカル」は、親が1930年代から40年代に共産主義運動に参加しており、自分は社会科学とか行政学を専攻するという意志でハーヴァードに入学している。そして、入学後はSDSの活動にも加わって、リーダーシップを握ってきた。政治的に立場の異なる者とも交流あり、ケルマンは「人間的」で「いいやつ」が多

いとまで言っている。政治的抵抗の危険さを親から学んでいるため、建物の占拠のような過激な行動には躊躇するところがあった。実際、ユニバーシティ・ホールの逮捕者の中には、「生まれながらのラジカル」に属する学生はほとんどいない。しかし、ケルマンが入学した1966年から1969年までの間に、「ワスプの反逆者」によってリーダーシップを奪われてしまった。ケルマンは「ワスプの反逆者」を露骨に敵視して、彼らの行動の背景を次のように書いている。

「彼らは生きる意志を失った貴族であり、倫理的な衰退が表にあらわれている。墮落しつつあるアメリカ貴族の有り様は、ステレオタイプ化された貴族階級の基準には全く当てはまらない。トップにいる者に自信のあるものはない。下の者に配慮する心もない。人間的で社会サービス志向の民主的な貴族も見当たらない。……アメリカの上級階級は、露骨で冷酷な競争を勝ち抜いた結果として形成されたが、何世代かを経て、今やその末裔は旧世代の基準に遠く及ばないような、ソフトで退廃的な存在となっている。この罪深き貴族は、政治を政治としてではなく、自己表現（self-expression）のためにあると考えている。彼らは自分だけではなんともしようがない無力感を抱いており、失われた活力を取り戻せるような可能性を求めている」⁽⁴⁴⁾。

とりわけプレップ・スクールの出身は目の敵にされており、ハーヴァードの縁故主義的な入学者選考の産物と見なされている。ケルマンは、入学して2日目の日記に「むかつくような、プレップ・スクールのがき！」に会ったと書いている。背が高く、ブロンドの髪をして、あまり太ってもいない男がいて、階段の上から、また下から辺りを見回している。傲慢な目つきをしており、唇からは言葉を発しなくても侮られていることが伝わってくる。「軽蔑したような彼の顔つきを見て、自分も彼を軽蔑してしまった。彼の軽蔑の対象は、プレップ外の世界に広がっていた。自分の軽蔑は直接彼に向かった」とある⁽⁴⁵⁾。

なぜ、特権的なワスプのエリート層出身の学生が、ハーヴァードで過激な行動に走ったのか。この問題について、ユダヤ系の著名な社会学者リプセットが説明を試みている。満足できそうな説明は難しいとしながらも、論点は次のようである。上流階級出身のラジカルが、いったん強硬な反戦、反エスタブリッシュメントの立場をとってしまえば、もはやその道を突き進むしかない。穏健な路線を選んでしまえば、特権的な階級の出身を理由に逆に攻撃されてしまう。ラジカルな、またリベラルな活動家を親を持つ学生は、左翼の大義が一夜にして成就できとは思っていない。しかし、上流出身のラジカルにはそのようなセンスが欠けていた。リプセットは「改宗した真の信者の熱狂」であったと整理している⁽⁴⁶⁾。

この説明では、やはり十分ではないかもしれない。アメリカ上流階級の盛衰を冷静に観察してきた、社会学者ボルツェルの言葉のほうがより説得力がある。ボルツェルは、セントポールズ校出身で自らを新興富裕層（robber baron）の第3世代と呼んでいる⁽⁴⁷⁾。第4世代で生じたユニバーシティ・ホールの逮捕劇は、ワスプ・エリート層の権威の失墜を示す出来事であることは確かであるが、いくらケルマンが「青白いプレッピー」と侮蔑しようとも、「青白いプレッピー」こそが、ユニバーシティ・ホールを占拠するという究極の結論を導いて、警官に叩きのめされて逮捕された。「青白いプレッピー」によるユニバーシティ・ホールの占拠は、「アメリカの階級関係の歴史において、活力のある、象徴的な出来事だったのである」⁽⁴⁸⁾。ボルツェルは、1969年4月の「偉大なる反乱」に、第4世代が自らの手で下した「階級の死」を見ている。

ボルツェルからすると、第2次大戦後に生まれて、1960年代後半に大学に入学した第4世代は、

メディア世代であり、メリトクラシー世代である。メディアは階級の壁を越えて情報や娯楽を若者世代に伝えるし、学業成績も階級の障壁を越えてエリートを選別する手段である。プレップ・スクールにおいて、外部社会からの影響を最小限にとどめて、上流階級の子どもならびに上流階級に参入しようとする家庭の子どもに、品性や道德などの上流階級的な価値を教えるというような教育も、1960年代になると困難になっていた。本稿でも、すでにプレップ・スクールへのメリトクラシーの浸透や伝統的な教育方法が直面した問題について説明した。有名大学へ入学するために必要なSAT得点が飛躍的に上昇して、ハーヴァードやプリンストンやイエールも、メリトクラティックな価値が支配する大学に変貌していた。1960年代も後半になると、平等な機会とエリートの選抜が普遍的な価値として受け入れられて、反エスタブリッシュメント的気運の高まりとともに、ワスプ上流階級の卓越性も色褪せていた。

ワスプ上流階級の衰退は、同時に他の集団がエリートの地位へと台頭してきたことを意味する。裕福で都市郊外に居住するユダヤ系こそが、この時期までにエリートの地位を獲得した。リブセットもその一人である。第4世代の若者は上の世代とは異なり、デモクラットを支持し反ユダヤ主義に反発している。さらにボルツェルは、1960年代のフィラデルフィアでプロテスタント上流階級の娘がユダヤ系と結婚するようになった点を指摘している。そして「衰退する階級の女性は、進取の気概を持った上昇する階級の男に魅了されてきたのだ」と述べている⁽⁴⁹⁾。

ユニバーシティ・ホールの逮捕劇は、ワスプ上流階級の衰退の最終段階を飾る「打ち上げ花火」のような役割を果たしている。ケルマンのプレップ・スクール出身に対する侮蔑も地位の逆転を映し出すものにすぎない。次の事実注目しよう。ユニバーシティ・ホールを占拠した学生は、過激派だけではなく。政治とは無縁で奇妙な連中も含まれていた。女性もいたし、演劇センターや社交クラブからやって来た者もいた。パーティからタキシードを着たまま駆け付けた者もいた。ラジカルが提出した政治的要求の内容を知らない者までいた。

このことを告げる記事をハーヴァードの学生新聞『Crimson』に書いたのは、セントポールズ校出身で当時の編集主幹であった学生である。記事は、ユニバーシティ・ホールで逮捕された中に含まれていた、プレップ・スクール出身の非政治的で奇妙な者たちの間では、「一体感」や「気持ちの高ぶり」があったことを伝えている。この編集主幹は、その後しばらくして、自らの命を絶つことになる。優れた運動選手で、とても人気があり、もちろん学業もトップであった。今のハーヴァードの入学選考基準において求められそうな資質を、すべて備えた学生だったのである。ボルツェルは言っている。「ワスプ・エスタブリッシュメントについては忘れてしまうことこそが、ベストである」⁽⁵⁰⁾。

7. セントポールズ校の変化

1954年12月の『ニューズウィーク』誌に、ニューハンプシャー州コンコードにあるセントポールズ校に新しい校長が着任したという記事が掲載されている。新しい校長はマシュー・ウォレン(Matthew Warren)という。監督教会の牧師であって、公立高校の出身だが、日曜学校などの教育活動で名声を得て、今回、東部のプレップ・スクールの中でも、最も古く、裕福で排他的な学校の代表とされるセント・ポールズ校の校長に任命された。セントポールズ校は、最も優れたプ

表1 セントポールズ校生徒の多様化

(1) ビッグ3への進学										
年次	1947	1954	1962	1965	1969	1976	1986	1990	1995	1996-99
Harvard	14	20	16	22	16	17	18	9	7	33
Princeton	21	9	12	7	9	11	7	8	10	26
Yale	39	19	19	13	9	9	10	14	7	18
ビッグ3 計	74	48	47	42	34	37	35	31	24	77
卒業生数	100	73	94	102	96	137	146	136	128	505
ビッグ3 %	74.0	65.8	50.0	41.2	35.4	27.0	24.0	22.8	18.8	15.2
(2) IVYリーグ校への進学										
年次	1947	1962	1965	1969	1976	1986	1990	1995	1996-99	
IVY 進学数	76	55	61	41	62	58	47	52	196	
卒業生数	100	94	102	96	137	146	136	128	505	
IVY %	76.0	58.5	59.8	42.7	45.3	39.7	34.6	40.6	38.8	
進学先大学数	13	25	28	33	50	46	47	51	93	
(3) 在校生の出身地										
年次	1950	1954	1964	1968	1974	1985	1995	1999		
New York %	36.3	27.5	20.8	22.5	22.8	18.0	12.7	9.9		
Pennsylvania %	14.0	18.0	8.5	6.8	5.6	4.8	3.6	2.7		
Massachusetts %	9.2	8.9	12.9	11.3	13.6	12.8	12.9	13.9		
New Hampshire %	2.5	2.4	9.4	9.3	12.2	9.8	15.3	16.5		
その他の州 %	36.3	38.6	41.5	43.7	41.7	47.5	44.8	43.1		
海外 %	1.6	4.7	6.9	6.4	4.0	7.0	10.8	14.0		
計	435	451	448	453	499	499	498	527		
(4) 奨学金										
年次	1950	1954	1964	1974	1985	1994	1999			
奨学生 (人)	100	100	121	142	150	153	183			
奨学生 (%)	23.0	22.2	27.0	28.5	30.1	30.0	37.0			
計	435	451	448	499	499	509	527			

レップ・スクールの1つで、クラシックな教育の理想が守られているところである。男子生徒のキリスト教的な「品性」の形成を重んじ、彼らの大半が「ビッグ3」と呼ばれるハーヴァード、プリンストン、イエールに進学する。記事には、「ビッグ3」への進学がやや低下してきたことや、生徒の親の所得が高すぎるという点が問題になりつつあるが、ウォレン校長は、宗教教育を充実させ、確立された伝統を維持するであろうし、他の学校のように古くからのカリキュラムを捨て去る必要はないだろうとある。また、セントポールズ校の卓越した教育の成果は、生徒中心、また生徒と教師関係中心の教育のおかげであり、「それを変更するのは私の仕事ではない」というウォレン校長の言葉も取り上げている⁽⁵¹⁾。ウォレン校長の在任期間は、1954年から69年までであった。着任当初は予想もしなかった、変化の嵐に直面したことは言うまでもない。

まず、第2次大戦後のセントポールズ校の変化をわかりやすい数値を用いて示しておきたい⁽⁵²⁾。表1は、セントポールズ校生徒の進学先や出身地や奨学生の割合に関する推移である。各年ごとの正確なデータを収集することは難しいが、ある程度は変化の様子を捉えることができるであろう。なお、セントポールズ校が男女共学になるのは、1971年である。

表1(1)は、ハーヴァード、イエール、プリンストンにどの程度進学してきたのかを示している。数値はそれぞれの年次の『年次報告』に掲載されたものである。1947年を見ると、卒業生100名の74名がビッグ3に進学していた。ウォレン校長が着任した54年には確かにやや低下して、

65.8%になっている。ビッグ3の割合の推移をたどると、その割合が戦後低下を続けてきたことがわかる。近年では15%程度となっている。ただし、この数値が必ずしも低いとは言えない。フィリップス・エクセター校やアンドバー校でも同じ程度の数値になっているのである。大学ごとに数値を見ると、1947年におけるハーヴァード大進学者の数がやや少ない。1940年では34名が進学していた。ハーヴァードのコナント学長時代に推進されたメリトクラティックな入学者選抜の影響が読み取れる⁽⁵³⁾。コナント学長以後になるとハーヴァードへの進学者数はやや持ち直している。入学者選抜で学業以外の要素もかなり考慮されるようになった結果が多少なりとも反映している。イェールへの進学者も、1965年あたりから急に少なくなったことがわかる⁽⁵⁴⁾。クラークによる方針転換の結果を読み取ることができるのである。

表1(2)は、ビッグ3を含めたアイビー・リーグ校への進学者数の推移を示している。1960年代後半に、その割合が確かに50%以下に低下しているが、その後は大きな変化が見られない。40%程度がアイビー・リーグ校へ進学している。1970年代からアイビー・リーグ校への進学者の割合については、あまり変化がないことから、セントポールズ校生徒の優秀性に関して、一定レベルが確保されていると判断してよいだろう。進学先大学の数を見ても、それは徐々に増えて1976年では50校になっているが、その後はほぼ一定である。

表1(3)を見よう。在校生の出身地を6つのグループに分けて、それぞれの割合の推移を示している。セントポールズ校は、マサチューセッツ州の北、ニューハンプシャー州にあるので、この2つの州を地元とみなそう。1950年の在校生を見ると、地元はわずかに11.7%である。一方、ニューヨーク州とペンシルバニア州の出身者を合計すると50%を越える。これは、ニューヨークやフィラデルフィアのワスプ上流階級が、子どもを人里離れたセントポールズ校の寄宿舎に入れて、クラシックな教育を受けさせていたことを意味している。戦前からのこの特徴が、1950年代までは維持されていた。その後、ニューヨークとフィラデルフィア出身の割合が低下を続けている。60年代には30%を下回るようになり、最近では10%に近づいてきた。地元のニューハンプシャー出身が増えてきているが、伝統的な富裕層の居住地ではない。セントポールズ校の生徒をリクルートする方針が変更され、1957年から夏期に実施されてきた、地元の公立学校の学生を対象とした「Advanced Studies Program」の成果が表れているようである。海外から来る学生も増えている。

表1(3)の結果は重要である。表1(4)の結果と組み合わせて読むならば、生徒の出身背景の変化を伝えてくれる。伝統的なワスプ上流階級出身が減少し、奨学金による援助を受けている者が増えて、生徒の出身背景も多様になってきたことがわかるのである。ワスプ上流階級の教育機関としての性格がどのあたりで変化したのか、それは急激なものであったのかについては、このデータだけでは不十分であろう。しかし、本稿で展開してきた議論を踏まえるならば、1960年代に変化は少しずつ進行していた。60年代後半には、象徴的な出来事があったが、その後も変化の方向とペースは一貫している。メリットを維持しつつ、生徒構成の多様化が進められているのである。もちろん、この点を詳しく検討するためには、マイノリティ、とりわけアフリカ系の生徒数に関するデータが必要だが、断片的な数しかわからなかった。1968年ではわずかに9人であったが、1972年には39人になっている。

カリキュラムの変化をわかりやすく数値化することは難しい。しかしカリキュラムのほう改革の対象になっていたし、変化もドラスティックであった。1950年代のセントポールズ校のカリ

キュラムを見ると、古典と宗教が強調されていたことがわかる。必修は、ラテン語2年、宗教（キリスト教）学4年、英語4年、現代外国語2年、数学2年、ヨーロッパ史とアメリカ史2年であった。選択科目としては、ラテン語、古代ギリシャ語、上級数学があった。その他には、ほぼ毎食、正装して決められた座席で食事を取ること（seated meal）、週8回のチャペル・サービス、週4、5回の運動競技への参加などが課せられていた。大学準備教育だけではなく、古典的なキリスト教文化の伝達と身体訓練を目的とした教育だったことがわかる。

カリキュラムの変化は、予想されるように、科目の内容が細分化され、選択科目が増えて、宗教教育が後退するという方向であった。1960年代は学業重視の傾向が強まり、大学入学に備えて、より短い時間でより多くの課題を学べるようにカリキュラムが工夫された。ただし、その一方で学校対抗の運動競技数も増えた。セントポールズ校は伝統的に、アイスホッケーやボート競技が強くて有名だが、サッカー、ラクロス、野球なども加わり、1965年には12のスポーツで学校対抗試合に参加するようになった。もちろん生徒は、複数の運動競技に加わらなければならない。1960年代になれば、学業も厳しくなった上に、課外活動においても忙しくなった。しかも、有名大学への入学も競争が激しい。学校の規律は、宗教的伝統が維持されていて、旧態然として厳格である。公立のハイスクールの自由な学生生活の様子も伝わってくる。さらに、外部社会は、ケネディ暗殺、キング牧師暗殺、ベトナム反戦など騒然としている。孤立した空間で学ぶ学生に加わる圧力も増していた。

校長のウォレンは、セントポールズ校が直面している問題を鋭く察知して、60年代に何度かカリキュラムの改革を実施している。上級用コース（advanced placement courses）、優秀生のための特別コース（honors sections）、チュートリアル、大学レベルのレクチャー、新しいテキストの利用、視聴覚教材の利用などが試みられており、最上級生の「自主研究」の自由度も高まった。宗教教育の規律に対する不満に対しても、チャペル・サービスを軽減したが、ウォレンの方針は、基本的には伝統を維持し、生徒をセントポールズ校の規範にいかにか順応させるかというものであった。

1968年にセントポールズ校生徒の不満は頂点に達する。アメリカ社会におけるワスプ・エリート層の権威の失墜は、セントポールズ校という権威の失墜をも意味した。学校生活に対する無用な制限が多く、教師が生徒を子どもとしてしか扱わないことを批判する文書に、162名の上級生がサインをして、学校内に配られた。続いて、学校改革のための提案を盛り込んだ文書も提出された。改革の方向は、チョート校とほぼ同じである。生徒にもっと自由や責任を与えること、上級生の授業出席を自由にする、生徒と教官との協議会の設置、成績評価の簡略化、カリキュラムにおけるスケジュールの柔軟性と多様性を高めること、男女共学、学校外での自主学習を認めること、チャペルへの出席の自由、教員会議での学生の投票権、服装の自由などが要求の骨格であった。この提案を受けて、68年に教師と生徒から構成された「カリキュラム研究グループ」が設置されて、カリキュラムと学生生活が全面的に見直されることになる。これらの提案の大半は実現されており、現在では自明のことであろう。より個人主義的で革新主義的な方向への転換が図られる。このとき、伝統的なセントポールズ校の教育が終焉を迎えたことになる。

1970年代のカリキュラムを見ると、この変化がいかに大きかったかがよくわかる。1974-75年では、提供科目がきわめて細分化されて150科目以上になっている。1学年の生徒数が130名で4学年を合計しても全校生徒は520名ほどである。1教室10人程度の少人数教育が基本である。歴

史だけでも45の異なる授業が提供されている。「アフリカ文化史」「中国史」「女性史」「アメリカ教育」というようなタイトルで、大学の授業のミニチュアである。もちろん数学や物理などは、初級から上級への履修順序が考慮された授業となっている。1974-75年の『履修案内』には次のようにある。「必修科目は、個人の選択の自由を大いに認めながら、履修の順序や領域を考えて、適切に配分されている。生徒は自分の関心を追求し、自分の勉強へのモチベーションをみたとすることができる機会を得ているのである。・・・生徒は各自で、アドバイザーや親と相談しながら、自分の関心を満足させると同時に、高度な教育を受けた人々にふさわしい活動や技能や見識を与えてくれる、科目の履修を計画すべきである」⁽⁵⁶⁾。

細分化されすぎた科目が統合されたり、分類カテゴリーが「ヒューマニティ」に変更になったりしているが、この特徴は現在でも変わらない。ラテン語やギリシャ語も消滅していない。選択科目として存続しており、毎年一定数の受講者がいる。1970年代から芸術の部門が拡充されてきており、2000-01年では、Fine Artsだけで24の授業が提供されている。

2000年秋にセントポールズ校を訪問した際、2度、朝のチャペルに出席した⁽⁵⁷⁾。最初は、たまたまハロウィンであったから、「ミスマッチ」な服装をすることがテーマで、教師は学生の要求通りに服を着ていた。校長はピエロのような服装であったし、物理の教師が普段着のままというような「ジョーク」もあった。2度目は、最初ゲストとして来ていた英国国教会の牧師から、拡張高いスピーチがあったのだが、賛美歌を歌う段となって、突然「今日は手元に配ってあるコピーにある歌を歌います」と言う。なんとビートルズの「イエロー・サブマリン」であった。水曜日の夜は、義務ではないが、チャペル・サービスということだったので、教会に行ってみた。時間になっても誰も来ない。予定の時間から半時間ほど遅れて、一人の生徒がのぞきに来たが、誰もいないとわかって帰っていった。

かつてセントポールズ校は「チャーチ・スクール」と呼ばれ、「厳かなチャペルの光景」を卒業生は回顧して語っている。セントポールズ校に対して「愛憎半ばする気持ち」を持っているとしながらも、アルドリッチは「決して忘れることができない光景」だと言う。「耐えがたいほどの強固な連帯感と恐ろしいまで個人の重要性を象徴する光景」とまで形容している⁽⁵⁸⁾。1970年代や80年代のチャペルの光景を写した写真や紹介文を見るかぎりでは、「厳かな光景」は維持されていたようである。近年、世俗化がさらに進行したと判断してよいのであろうか。

セントポールズ校も、もはや文化的に同質的な環境で、ワスプ上流階級の文化的、宗教的価値が教えられるところではない。自然に恵まれたクラシックなキャンパスにはかつての雰囲気は残っているが、1960年代後半を境にして、世俗化され個人化された、静かで自由な学習環境に変化してきた。地理的には孤立していようと、外部の基準が深く浸透している。生徒や教師の構成、進路、カリキュラムなどにおいて、優秀性を維持する一方で、さらに多様性も高める方向に進まなければならない。まだアフリカ系の学生数が多くなく、セントポールズ校では疎外感を感じている。そのためにも非白人、とくにアフリカ系の男女教師を増やすことが求められている⁽⁵⁹⁾。

1960年代後半以降、エリート大学でもプレップ・スクールでも、生徒の構成がより重視されるようになった。女性やマイノリティの比率を明示しなければならない。SAT得点だけでは、有名大学へは入学できない。現在、アイビーリーグ校など有名大学では、志願者それぞれについて、エッセイや推薦状、学校の成績証明書、テスト得点などがフォルダーに整理されて、大学の入学

者選考では、それらがすべて考慮される。メリットはテスト得点よりも広い意味を持ち、入学者選考では生徒集団をどのように構成できるかという基準も入る。エリート集団の構成に注意深い配慮がなされる。15%は再生産、25%はテスト得点、10%はマイノリティというように、エリート集団がデザインされている。エリート集団の構成要素が多様なほど望ましいとされている。

ブレップ・スクールの現在のカリキュラムは、このような入学者選考基準への対応であり、芸術やスポーツを含めた広い範囲の選択肢を用意する。生徒の構成を多様化する必要もある。個々の学校は、生徒の個別のニーズに細かく対応して、それぞれの科目の内容や教え方を競うようになる。その結果として、ブレップ・スクールでは優秀性の標準化が進行している。

注

- (1) Jared H. Ward, *St. Paul's School: A Case Study in Institutional Change*, BA Thesis, Department of History, Harvard University, 1978, p.i.
- (2) Steven B. Levine, "The Rise of American Boarding Schools and the Development of a National Upper Class," *Social Problems*, vol.28, no.1, 1980, pp.61-94.
- (3) C. Wright Mills, 1956, 鶴飼信成・綿貫譲治訳『パワー・エリート 上』（東京大学出版会, 1969年）, 105頁。
- (4) 同書, 104頁。
- (5) 1960年代後半にブレップ・スクールで生じた生徒の反抗は、主として次の3つの点に焦点が当てられていた。日常生活上の規則とかタイトな日課に関する厳格な制限を緩和すること。カリキュラムの柔軟性を高めて、より現代的で社会的に意味のある科目を増やし、最上級生にはキャンパスを離れて、個人研究をもっと認めること。規律については、教員による一方的なコントロールよりも教員と生徒が責任を共有すること。Christopher F. Armstrong, "On the Making of Good Men: Character-Building in the New England Boarding Schools," in Paul William Kingman and Lionel S. Lewis eds., *The High-Status Track: Studies of Elite Schools and Stratification* (State University of New York Press, 1990), p.14.
- (6) Morton Keller and Phyllis Keller, *Making Harvard Modern: The Rise of America's University* (Oxford University Press, 2001), p.33.
- (7) Nelson W. Aldrich Jr., 1988, 酒井常子訳『アメリカの上流階級はこうして作られる オールドマネーの肖像』（朝日新聞社, 1995年）, 212頁。
- (8) ここでは、Levineの前掲論文の分類に従った。社会学者ボルツェルが作成した、16校のリストが基礎になっている。E. Digby Baltzell, *Philadelphia Gentlemen: The Making of a National Upper Class* (Free Press, 1958), pp.305-307.
- (9) ここでの記述はアームストロングの博士論文を基にしている。Christopher F. Armstrong, *Privilege and Productivity: The Cases of Two Private Schools and Their Graduates*, Ph.D. diss., University of Pennsylvania, 1974. なお、精神分析家エリック・エリクソンの息子で社会学者のカイ・エリクソンは、パトニーの卒業である。
- (10) クックソンとパーセルは、パトニーの創設によって、1960年代になって多くのオルターナティブ・スクールが登場する道が開けたとしている。Peter W. Cookson, Jr. & Caroline H. Persell, *Preparing for Power: American's Elite Boarding Schools* (Basic Books, 1985), p.52.
- (11) Geoffrey M. Kabaservice, *Kingman Brewster and the Rise and Fall of the Progressive Establishment*, Ph.D. diss., Yale University, 1999, pp.31-33. ベルモント・ヒルは、ハーヴァードの教授たちが自分たちの子どものために創設した学校である。なお、イエールの入学者選考基準の改革については、岩井八郎「標準化された優秀性—アメリカにおける私立エリート中等学校の伝統と変容」『京都大学大学院教育学研究科紀要』（第47号, 2001年）の110～112頁を参照されたい。
- (12) Neil L. Rudenstine, *Pointing Our Thoughts: Reflections on Harvard and Higher Education 1991-2001*

- (Harvard University Press, 2001), pp.319-327.
- (13) *ibid.*, p.320.
- (14) "The Prep School Now: Sturdy, Old Traditions-And Brand New Ideas," *Newsweek*, September 19, 1955, pp.32-37.
- (15) *ibid.*, p.32.
- (16) *ibid.*, p.35.
- (17) "Prep Schools-What They Offer, The Pros and Cons," *Business Week*, October 26, 1957, pp.116-122, pp.125-142.
- (18) E.Digby Baltzel, *The Protestant Establishment Revisited* (Transaction Publishers, 1991), p.91.
- (19) Nina McCain, "New Ties for the Old Schools," *Education Digest*, vol.33, November, 1967, pp.32-35.
- (20) "The Prep School Boom," *Change*, August 1976, pp.16-19.
- (21) Lisa Birnback ed. 1980, 宮原建治訳『オフィシャル・プレッピー・ハンドブック』（講談社, 1981年）。
- (22) 奥出直人『アメリカン・ポップ・エスティック 「スマートさ」の文化史』（青土社, 2002年）は、ユダヤ系の非プレップであるデザイナー、ラルフ・ローレンが、上流階級のスタイルを「よい趣味」として1970年代以降に復活させた点を指摘している。またプレップ・スクールの変化についても簡単に述べられている。ラルフ・ローレンについては、越智道雄『ワズプ（WASP）アメリカン・エリートはどうつくられたか』（中公新書, 1998年）の226～228頁にも同様の記述がある。
- (23) Lisa Birnback ed. 前掲訳書, 86頁。この書物では「ジェントルマンのC」もネガティブには扱われておらず、「体裁のよい」授業の取り方となっている。同訳書, 91頁。
- (24) 同訳書, 84頁。
- (25) 以下の記述は、James Riordan, 1995, 遠藤利国訳『オリバー・ストーン 映画を爆弾に変えた男』（小学館, 2000年）による。
- (26) 同訳書, 31頁。
- (27) 同訳書, 33頁。
- (28) Al Laney, *Prep Schools: Profiles of More Than Fifty American Schools* (Doubleday & Company, 1961), pp.116-117.
- (29) 以上の記述は、Dan A. Oren, *Joining the Club: A History of Jews and Yale, Second Edition* (Yale University Press, 2000), pp.198-230 に基づいている。なおユダヤ系学生に対する「割当制」の歴史については、Marcia G. Synnott, *The Half-Opened Door: Discrimination and Admissions at Harvard, Yale, and Princeton, 1900-70* (Greenwood Press, 1979) を参照。
- (30) Al Laney, *Prep Schools*, *op.cit.*, p.116.
- (31) David Karen, *Who Gets into Harvard?: Selection and Exclusion at an Elite College*, Ph.D. diss., Harvard University, 1985, pp.68-177 を参照した。
- (32) ハーヴァード大の入学選考の詳細な手続きとその結果に関するデータは、Penny H. Feldman, *Recruiting an Elite: Admission to Harvard* (Garland Publishing, 1975) を参照した。
- (33) Penny H. Feldman, *op.cit.*, pp.65-71, p.113.
- (34) イェールの改革とブルースター学長については、Geoffrey M. Kabaservice, *Kingman Brewster and the Rise and Fall of the Progressive Establishment*, *op. cit.* また、Nicholas Lemann, 1999, 久野温穂訳『ビック・テスト アメリカの大学入試制度 知的エリート階級はいかにつくられたか』（早川書房, 2001年）の12章にも詳しい。
- (35) 以下の記述は、Peter S. Prescott, *A World of Our Own: Notes on Life and Learning in a Boys' Preparatory School* (Coward-McCann, 1970) に依拠している。
- (36) 記事の全文は、Peter S. Prescott, *op.cit.* pp.396-398. クラークと教師とのやりとりの様子については、pp.198-205を参照した。
- (37) *ibid.*, p.398.
- (38) *ibid.*, p.305.
- (39) *ibid.*, pp.336-337.
- (40) *ibid.*, pp.338-345.

- (41) Morton Keller and Phyllis Keller, *Making Harvard Modern: The Rise of America's University*, op.cit., pp.314-315.
- (42) Steven Kelman, *Push Comes to Shove: The Escalation of Student Protest* (Houghton Mifflin Company, 1970).
- (43) ibid.,p.140. なお逮捕者数は、注(41)の文献が示す数値となる。175名が公式であろう。
- (44) ibid.,p.145.
- (45) ibid.,pp.11-12.
- (46) Seymour M. Lipset, "Political Controversies at Harvard, 1636-1974," in Seymore M. Lipset and David Riesman, *Education and Politics at Harvard* (Carnegie Commission on Higher Education, 1975), pp.250-251.
- (47) 第1世代は、南北戦争後に富を築いた人々である。第2世代は1920年あたりまで、第3世代は1940年代までにブレップ・スクールで学んだであろう。そして第4世代は60年代後半に大学入学している。ボルツェルは、1915年生まれである。ボルツェルについては、例えば、Dennis H. Wrong, "Digby Balzell: Sociologist and Critical Celebrant of the Upper Class," *Sociological Theory*, Vol.17, Number 1, 1999, pp.112-116.
- (48) E. Digby Balzell, *The Protestant Establishment Revisited*, op.cit, p.95.
- (49) ibid., p.92.
- (50) ibid., p.97.
- (51) "New Logger at St. Paul's," *Newsweek*, December 6, 1954, pp.44-45.
- (52) 資料は、セントポールズ校 Ohrstrom Library のアーカイブ所蔵の *The Annual Report of the Rector of St. Paul's School 1947-2000* (St. Paul's School, Concord, New Hampshire), *St.Paul's School, Catalogue 1947-2000* (St. Paul's School, Concord, New Hampshire) による。
- (53) エクセクターやアンドーバーの数値については、岩井八郎、前掲論文「標準化された優秀性—アメリカにおける私立エリート中等学校の伝統と変容」の108頁表1を参照されたい。
- (54) イェールへの進学者数は、1966年に6人、1967年に7人になる。ウォレン校長は、イェールの学長ブルースターに会っているが、事態は変化しなかった。August Heckscher, *St Paul's: The Life of a New England School* (Charles Scribner's Sons, 1980), p.312.
- (55) カリキュラムの変化は、注(52)の資料を用いた。また変化の背景についての記述は、Jared H. Ward, *St. Paul's School: A Case Study in Institutional Change*, op.cit., August Heckscher, *St Paul's: The Life of a New England School*, op.cit., August Heckscher, *a Brief History of St. Paul's School 1856-1996* (St. Paul's School, Concord, New Hampshire, 1996) を参考にしている。
- (56) *St.Paul's School, Catalogue 1974-75* (St. Paul's School, Concord, New Hampshire).
- (57) 2000年10月30日から11月3日まで当校を訪問した。同行していただいた、ブラウン大学ロバート・マーシュ (Robert Marsh) 名誉教授に感謝いたします。
- (58) Nelson W. Aldrich Jr., 1988, 前掲訳書『アメリカの上流階級はこうして作られる オールドマネーの肖像』214~215頁。
- (59) 1970年代初めには、セントポールズのマイノリティ学生の役割に関して、熱い議論があった。その後も、アフリカ系の生徒数を増やすことが課題となっているが、そのためにもアフリカ系の教師を増やさなければならない。アフリカ系学生にはあまりにも違和感を抱かせる環境だと評価されている。Sara L. Lightfoot, *The Good High School: Portraits of Character and Culture* (Basic Books, 1983)には、セントポールズ校に関するレポートがある。素晴らしい学習環境、厳かなチャペルの光景、芸術を重視する教育などについて賛辞を送りながらも、マイノリティが一体感を持ってない点を指摘している。私が2000年秋に訪問したとき、アフリカ系の男性教師を採用できて、アメリカン・フットボールのコーチもしてくれるから、少しはよくなるのではないかという話を聞いた。

(教育社会学講座 助教授)